玉川日記 二編 中

へ 13
3188
5

門へ13
3188
5

武振克興録

松下

昭和十
六月二五

松月堂古記　巻之五

露談玉川日記

江戸　南仙笑楚満人　作

第三回

世ていとなく谷の衣いとゞ一重うとゝわびうきいとゞ二人寝んと遍照がよみしゝ其故夏ゐよくも似たる今夜の高後家のお糸ハ紅のうちゐ思ふよ。さても這洛次郎外の女ゐハ目もうけず。斯寄こけく花香もうきゝ身をさゝで寒ハ。

病世怪しき名ふしぞと思ひにつけくいとかく
又恐ろしさうだりなく。藏海あいろるかもた
罪もめいすると聞くさまば。今我身のもしがこう
そ。其罪障をゆるさべしふてこそ深次郎ふ対ひ
ありさしのよるる不束みあをそのまくまで
聞てんみさるといのハう五しいともうこだけ
あのことも。礼のいくよるる夏ッイうんといくこいるる
もきのくあげるもだ。その夏が世間へもさ

きそハこさしだりの男の上でハあの者死ある
おまえの為ふなるぬとうぶと今生おまえの所へも
うくしくさしが所へ来るそうと時も以前
うろうく不應昔をしこもぞのぞさしが夏生
思ひきらたくしと恋の涙切ようかそうと夏さ
あごといろく木行でハなまえのまるる奇襲る
人ふ口説ばそうとハおるる氣わもまるをイヤく
ひふんなく異んしそこるんでんさが又ふん

げぞ。しかして二人が落あふといふハ。よく／＼
深い悪縁ぞと思ハつけ。さしもしも若い時から
さ業むで たのしみ事にまよひさまよふて。
まだ蕾の花の男と女を非業のさいごをさせたと
むくひがくるので 足が今までハ人をもいためし
ところにおちめくいる支がある ぞんげすへ罪も滅
すると人が今おまへにむかつて聞せまする。
まことよ誠に人の一念といふものハ恐ろしい物

だらト　それより深川のおまんがとうかまはぬ[illegible]うつゝり怪化れ
ごうぜんと又天の神縁をおそれしと深川に[illegible]とし月之入たのかの
としを[illegible]深川をおもひとり[illegible]なりしと[illegible]あまり
[illegible]なくなの[illegible]また深川の[illegible]ふかき
なげしたる○又深くて御坊を[illegible]解し[illegible]　暫くの
御縁を[illegible]一トしほ[illegible]
て源次郎ハかるきとおもしのどひ　源「さてハそうかぐ
どざりまする人の最初の一念ぐまよふると
いかとても直らずて本やなかくてハ足をつしたる眼
前きとんしが身にならずとハぞんじませねども
いの支でもござりまするぞ。ぜひとも人まつりましてぞ

寝てもさめてもあるこの夏ぞろう鬼のく仏
夏もしんにつきまぬこさんくもんが身の
ひとりてろとは青表紙のそもひとつの者
人の道といわ夏もぞんじてかりますがめるこの
るぞろうは思ひきくまねね「それぞうう
ね今夜いやひめとりに人もなく。婦人わまんと
ふうりいっ所ふ寝ことそ。わまんとうさぐ口うう
りさんうるのけまぶ。誰もうるのいうくう

ねどまでにかりくかんうるおとろざしが
うまくまとひつくびのうびいかれてうくのまで
愛者思婦の意情鮫潔うるいいとの艶姿鮮明
玲瓏とる深次郎が美少年。此一條下ヨ説並べ
て作者自ら歎息を。嗚呼あやくいうみ筆墨の
造化老実者のとがめいうわせんとは楚満人が罪
かくず。只流行と孔方兄の為わ本意をうくあの
美篇すくるうくず。見者ものひねう

玉川や
月代極男
さもつうらん
白下
澤岩

「サア深さん爰へ来てものを喰よ。あのうらねぞ今夜の業は夢ごとおもつく。此後は モウ
あつらうことはなし」がことを思ひ切つく。おんれよとの一ト言成
おとこぶるの方無事の事深ありてあはれ
なる是一日死女のうひ
はかどとなるものの情に
はたそぎりをもつるの女ありひとびいの男の
たさぐひものちぎりをとむぐ生するなる
のわ深「アイそんならそこへ這入つて一ツ呼ぶ喰てす
よいう人」「よいとりのあのトのはてさすがおかとぎのうぐいすしるあるおとは
おどろ〜」「コレサ深さん来んざる。そこあるそこへ
居ると宝のよ風邪でもひあくどらん。さてこ
ものの爺さん嘆さんを狙して言訳がるの
爰へ這入ッてかあ喰。そんるあ情がとるのと宅へ
入りと時か嘆さん」と告てあらせるこトあること
ものあるこがのもの深ひくやの
ひーよたてはとさるあ姿あ
赤ものを延深次郎がくを誘夜寒と凌ぐ国の中
りのあがあうどとさえ。きえぬ松の小夜嵐恵里
村の衣裳のこ。さるう寒さを告るあ〜正是巫

山の麓を流れあるいでは陽臺のちぎりをこめし
かなるべし。斯く更行潮の音をうぞあるにもや寅
の刻ばかりまやらんぞ網戸の間まで猶あり
の差縄が釣の餌さらく。寂莫たるあり様。阿
弥陀ぶつ。南無阿弥陀ぶつ。深次郎をゆりおこし
おこし「モシ〳〵深さん〳〵」深「アイ〳〵何ぞ」「ヨさ
あさあさあさに目をさまして
あのうらの。ぞうぞ一ツ呼てよりてくれまし」深「アイ〳〵ト

ひとり言にぞ行燈をかきたて「モシ〳〵」とゆり〳〵ずとん夜の
長の明ぬるを待ちかねたるこゝろ。
支いかりしろひ夢をうんとさとあれ〳〵ゆく〳〵。
まてしばしもぞうの殘りをおしのこりまどの落世の
義理おせばあらまくも思ひよりぬが婆婆の
なりふりひとりのものごろ必ずばけの落情者ぞ
とおもふまくもあるまじとうまに接
る姿はさすが藤園くのやしきうず。盛ハ過ぬ
たまぞ花あるまさる葉様のあるあるも深き風情

うり深次郎ハ和〳〵しげゐ 染「野ひなりこ私の
親ひがかるひまゝ〳〵されバ。モウ譬へゐんでもよふ
どゝりまし 爲「ヲヤ〳〵はるゐハ馬鹿ゐ支をゆ。今
の若さゐそんゐ支をゆるゞゐるものゝまゝ〳〵
とゝモウ夫人と一度おうとゝかゐとけゐおかさ
うゝゐんでる 本望ゞよ。とゝうゝゐ夫人ハ嬉
程も立るゐも有ゐうゞらうゞ。けゝて主の
妻女ゝとゝるのゝとゝを有ゐさんゐゝ。ゐゝんゐど罪ゐ物ハ

ゐのゝとゝいろ〳〵。そゝてとゝゝゞゐんゞ跡でも
ゐゝと思ひ出ゝ〳〵さら。ゐ茶ゝでもゝてゐんれ
よ 染「ヲヤそんゐゞゞァのゝのゝゐ支をゐのゝで
ゐのゐ爲「ヲヤゞァにちゞのハゐらものを 染「ゐん
にゝとゝのゝらゝゝのゞゐ爲「ゝさんゞ子 爲「信濃人嫁入
をするゝり外ゝさハゐ 染「ゝゐのゝり 塩兼屋
へ嫁入とゝゝゝゝのゝゐね 爲「そゐゝゝゞゝ
ゝゝゝゐの支ゞゝとゝゝの方ゞ今度ハ生ゝゝハら

みろちゃうきうの　染「イヤ　ようまれろとこうの
でも　浜分　ようね　おいと「とまで世間の義理もうん
みもうかく夫婦に　ようまるとよりの　変ろら
ぜんようの姫　うろのね　染「りろの　変愛ろうろ
落しとぜとで人　仕く　まり婦に　ようらのでやう　ねんう
おいと「イヤ　ようまるう　何が　今じゃうりとこしが
と　変をとんようのでも　男の　秋の　空しゃら
只　えうう　安いのく　笑おするのが。　まして

まえとうとこしと　年のぜんぜんろう　遠いくいるもの
と　話ていすてしまものごの時　ようの　間とたう
より　今　思ひ　ひく　ようの　方が　ようしごろう　染「ぜんの
ひへばくひと　増い　口ざれ　ト　ちうと　おいと「アイスこと
トいうしに　彼の　うちでの　変も　「ホウ　ようとトいうこ　二人　ようと
ひく　ようの　飛の　ぜんぜん　無言　ようくいまへば　ようとうこと
ようと　ハ　ようう　コウく　スウく　ようと　鮒の　変の　こと　言しまう。
ようと　染　ハ　稲　安　堪しも　染「ようの　ようぜんねう

ちゃ。物りさまさ。かいと一目がさめと所がつんぐうと
りへものごうう。めしじゃ支いろいろ。そして
まご衣のめけうあハあのごがあるごろうう。モウ
一ト寝入りおねふ。そ寒いしやうあるね。染一そのか
明けがさりへものいうけく さひいのものサトまさ
夜着のあへひどりとひと。嵐が棚でがらくと
何ちうおとすおとふ。染一ム化物がトひいおと一マ
とりト。ちうちう拘つまま又夜着をナ。がうとうがる

溪川の水音ドウ〳〵

第四回

斯く夜全く明るふ。糸染沢郎い昨夕のまが
をさまうまで比早く起て顔ちどそそぐ所へ。
瞬六ハ実藏を誘ひ立飯るに。折うく染沢郎が
信助も漸くと尋ね来るふぞ送ふその善兵を
慌しく。糸ハ路費の金をりいごして染沢郎が
衣服腹刀ちどをりあ又江戸まで飯る路金を

ことこゝ。其日は一日暮六ヶ方に逗留して翌日
まうるのまゝ久ゞ深沢郎太ろまを吾妻へ
ゆきぬ。深沢郎は名残は尽ねど せんなくて。
別を江戸へ立ぬ。道おく 逆成ふ あるじ。
おあぐ晴わく。ものゝ飯りに支をものがろに。
父母はとまを聞くめやうき支なりゝ江ろり
めしぬ其後お系も用支をゆまひて家へとち
ゆりしが。堀兼やへはりぎと繁くはのず。いと

陳遠ふ ゆらゝる寔や 逗留して の 後のあるに
ゆらぶ長。ひゝはものを思はざりゝると 古人の
よりゝどく。深沢郎は勢ふお系に一ト度逗
てゝり 寔 無くとて 其情 ふまを ゆく 只
昼夜とも 一室に引こもり 居て 何支も 懶く
ぜて。何方 ても そぞ。斯 ゆけ 父母はりや
病のそのや せんと 業 ぐゝらひ。ゝ長に
も 放蕩ふ ゆらぬ まふ。相鷹の嫁をむゝ人と

彼所這所を聞合せぬ。さて八百代彼兵代
田村なる芦辺屋田雀六が娘おぬきハ今年三五
の春をひろく。花まづひらんとする風情ひく。
是ぞ人のひすがんとおもふ
く男の風流男も多くけまど。父母ハ常掌の
多情の花と愛いくしむものゝ。文と容と
両全をひしまるゝ。其事を
ゐるに。男のなどある垣間見ん。堀兼屋の次

次郎がうゝ紀流ぶりに多くぶらく
病のこゝろとハなりぬ。うゝ田雀六夫婦
いとくなどろきく初めとおもう紀流乳母
をもとくその心腹をもせしふ。おぬきもつゝひふ
うゝく深沢郎を見そめくの恋病をうゝ
はぐくるに。乳母ハ云こと明白ふ田雀六まゝ
うゝ立ぶ。田雀六ハとを聞く。さるぐ
ものなるぶ。彼方ふく兼川もる支多ゝ一人り

婚姻のことも命あらんかぎりは、堀兼屋へ
しるく敬く西家へ出入する野巫医月下氷人
といふ者をもて姫君屋へ引込しふ井筒はいとを
よろこび勇代いかん論縁くくりひすめおねさろ
あてゆかるる妻も同居ことなるとなれば早くく
兼ねしも似合しき縁組ぞらとの道だりは
あるべきに父母の一子ろ男ふもさぞあるべし。
まづ一應は將深沢郎へ同じも挨拶して

氷菴きぐえし女房お和久にいくはまて斯と
深沢郎にいとせしふ案く遠ひて深沢郎は。
女房を持ことはいはぐどぐりまずときろうり
いろとて母もろ持ろ。いろくすくやくんても
只否ぐくとぐりいのの妻ちんきばかふ
ぐきうくくといのまろ妻でもあるろ一個
妻のの妻なきばかふ貧くのあく根でも乳
おえいろと妻かくぐ。えんでゆろくきなす

とい〳〵ことばよりと。口を開く〳〵そのうへ一向に其
ゆうなる夏もかく。只いぶかしくといふてんのうち
ばかり。不図ばかり。初めの時こそ伯母さま〳〵と
ちやほや〳〵調布屋のお糸さまばかの人をこの
家をよぶ夏をすゝめくゆらんとあをおもの
たるふお和久ハ神さま〳〵ぬ男の仏来戻る。世の
武蔵ものを携へて調布屋お来り。久とぶの活
の言ふけも。あつひぐ〳〵の挨拶。こゝ出茶こ

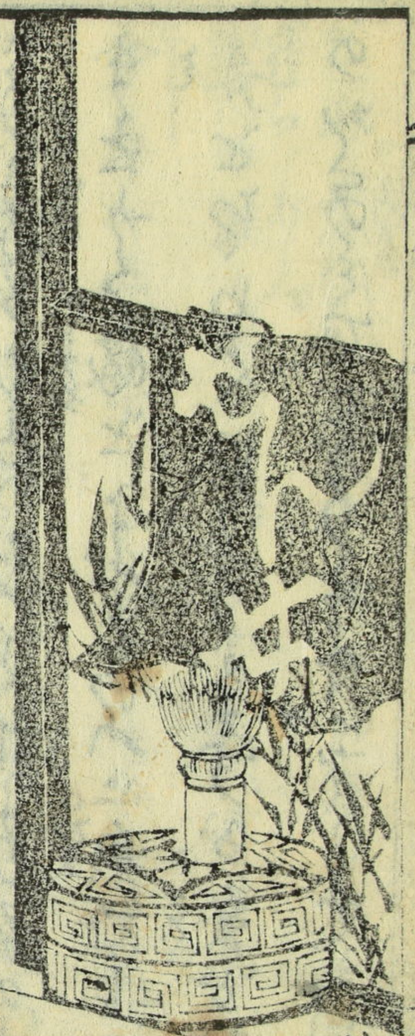
お莨盆と管待お糸が袖をひく人「アコレお糸
さまもう〳〵そのようふ地走ゆさまをいと
お解りませんでいるゆ。今日はさんぶ糸
まゝこいちとゆるこに折入ておこゝやさねば
ゆ〳〵ぬ夏があつく〳〵とぶもぶ出られて
前勝ゆゆ中ゆうゆまで。そこが日頃の会ごろ
ぶけト。ゆく〳〵お糸ハ「こゝハ〳〵おゆく夏の
何をおろ夏やうと。あゝこめくやまでもるけ

まど。各左門どのくまくなるまさのちい何
くら何までか世話ぐちにありましてあまごの
かうち。祝儀くらいも心易いるるーやごごりま
せぬる。彩むの無心のとハ他人ひさ。お糸さんくう
くいの妻がのるかどお。くうくーて下さりませと
るぜいつけてハんざさりませぬト。他ずるるさ
詞よおもくもうまーく。なく「その頼母ーい
ちろ。つね
ちんぺ。ぜくくよの者ろくあるまるるる主人でる

やまず。ハハ外の者へさのむより。お糸さんとお糸
ひすがよのとやます。ア。アノ深沢郎がことでご
ざりますト。きのく疵もあか糸い物り「ア、アノ
際次郎さんが。ぞうぞ者ますーさく「イエサ
ぞもいさーませぬが。はいえんざる氣分が
ろいーくとやて。ぞろこ人も出ぞうちふざろう
りまんくら。ぞつ労性でも出ぬうちふ疵と
ちくまるがよろろと。相應る者を舞ねまさ

もとろ。きいお聞かそびひもごぞりまする。ちょ代
ごぞら田村の芦辺屋のひすめ。おねきさんといのの
ここ今年十五ぐ。てうどこめをとと一ッ遠ひ。身代と
いく容体といく。ぞこふ一ッ長ぐんのるい娘あちち
うちうとぞ〜〜ありこのとアノ氷菴さをとこのんで
いこえ云辺ぐまりりまこと。うちも私も早達美
知いこ〜〜まして。大きとわようこんでのあとわとう
やここもとろが深い一向にふ兼知でさこ〜〜ふ

女房をもろ変いいやでぞりまするとりぞ〜まする
うう。外ふえんぞ約束でもりこ〜〜とのぞもある
ろといろ〜〜聞くまこ。ぞこのことすえん
えまを。私の口ううとんるとをやも奈何でど
ぞりまするぞ。あまいろうと並ぶり奥の方でぞり
まもとうう。嫁をよぶこいのと鬼でも来るそうに。
身をぞやくいやぞりまするが。髪がまへさんへ
のかこのこでぞりまする。こ〜〜ちらこの時の

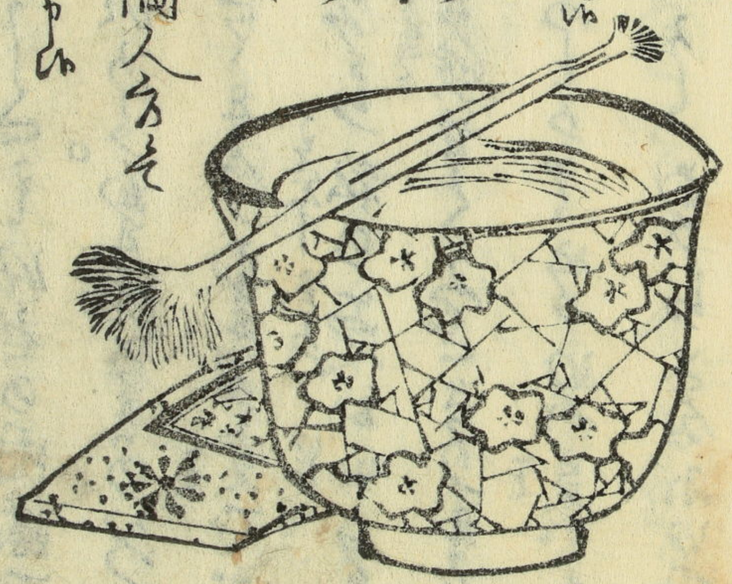


楚満人
仙女香白粉
新製艶姿二色
瑞祥如意白粉

荘訓舎

英笑画

岩井条三郎
家伝傳法
奇代の御薬
ほうがい
丁子こう
あぶら
楚満人
油町
御用



ひろうぬも。おまへさまをうまくぐろく
ぢに なるものあけまくさ はのその因縁でござり
ます。おまへさまのおろくやろ
を支ハ何のようぢまくまつもあまを支でおざり
まをろう。どれ面倒なぐらち私のあへおはなるまま
ちく。あまをにまくこを支甘くでござりません。それ
ままも又何の刻のうをろアあるりの支でまある
ちら遠義いりぬうをめうちさをおりのよう。

ぢのどおろーやうく でさりません。そををおろこ
ヤ ままをうとどんぢ まりてまりまくさと。
りをまくお糸ハ迷惑ばげあ「イエあのあのか
ろもうーとのおろでござりまをろう。その因沢の
るの支もどざりますまのが。よく世況何で源の
訳のあることでどざりまをろよ「サあそれで
どざりまをろう。あるをとおとのくヤまをそのこ
ば苦労なぐらトりのさへあまを況ざろ。お糸ハ

聞もあぐ〳〵〳〵おひと〳〵必ず私が住ぶかさ
ぬのお使がそらまのりまして。深さんおろそ
ぬ会点のあくまのてやう〳〵清合して
その日いろくを飯久〳〵なる。さてもお糸はんの間
おかるまん深沢郎が嫁を迎へるをいるはい金
吾夏をかりひてるべく金子でお祝ま嫁ぶも祝
まれとるまんば吾行くくらくと云聞をべしとを
きでる成日塩兼屋へ往わおろくハ新と見るより

聞もあぐ〳〵〳〵おひと〳〵先日ハ大きおわ世話
さるわかりまして。いろ〳〵愛情あぞ深沢郎ハ
お金にありて下女おかお糸ぶ来り〳〵ようを聞く。
せわく関係あぐらそのの侍ありまする見まかく。
へやお金をひでとるとこの客聽へまり見まば。お糸ハ
おろくとのろまお酒をのこもや御辞ぶの目
ぶ。九のりとして撫る新ば世をもの
ままば。深沢郎ハ一下しれ思ひ十すの花おお

あらくをそろそろれば。紙門をそろとかぶせ
深「とは、いかゝ、そんえ、久しぶりにまつたくまつたくうん
だが。どの、あさは、まつさ。何と思ふく。今日はお出
あさは、まつさと。いつもぜひ〳〵ゆうと。おかい面
ぜ。馬鹿のえは、とくすとこまつとろづぢ。深
次郎、久しぶりぐ伯父さんがお出あさはとく〳〵。
お前あんぞ。独はあるさの。深「ハイ何おりまつ
鰻でもとりにやりまあそうトいつとぞわてい鰻

ふてび深次郎お向ひ「エ〳〵モウ最前〳〵そろ
そろく雑走おあるく。モウ〳〵鰻もうえおまつぞくど
ぞりませんぞ。コレ深さえおまへおりさーぐちろとりて要
せる変ぐあるく下にあのぞト。烟草をそたつ死さそる。
永を朱羅宇の長ぎせる。あり死ひの異見えをまと
あるあ吹口へ。そりまとぬ身の内通りあるる薄
猿渡河の光とまあく思ひぞりくぐ切るぞ〳〵。

玉川日記巻之五終